

二〇二五年度 夏期「東大現代文」 問題【1】 解答モデルと採点基準

担当 中野 芳樹

〈一般的採点基準〉

- a 誤字・脱字・略字・表現未熟・文末表現ミス・文末句点なし等……マイナス1点。設問毎に減点
- b 未完成……失格
- c 解答欄の不正使用（二行書き、書き過ぎその他）……失格
- d 比喩表現のママなど……減点もしくは加点無し

〈設問別採点基準〉

Ⅰ（6点）

曖昧さを排除し、史実の画定を図る歴史学自体が、記録と不記載、事実、可能性、虚構を含む曖昧な全域の情報に拠るということ。

\*①は、必須ポイント

- ① 構文＝歴史学はくはに依拠している（基づく）、の意 1点
- ② 「この巨大な領域」＝曖昧（画定不可）な（領域） 1点
- ③ ②＝「書かれたこと、書かれなかつたこと、あつたこと、ありえたこと、なかつたこと」（簡潔に置換） 2点
- \*単に「事実として書かれなかつたこと」などは、不可。「巨大な領域」は、記録の無い事実と虚構だけではない。
- ④ 歴史学は曖昧さを排除しようとする（＝歴史（事実）を画定しようとする） 1点
- ⑤ 歴史学は②・③から情報を与えられている 1点

Ⅱ（6点）

歴史は、膨大な記憶のうち、国や社会の代表的価値観で中心化され、成員の自己像を構成する記憶とその操作であるということ。

\*①は、必須ポイント

- ① 構文＝歴史は（無数の記憶のうちの）一記憶である 1点
- \*「相対的に」＝唯一絶対ではない
- ② 「勝ちをおさめてきた」＝ある国、社会の・代表的な価値観によって・中心化されている 3点
- ③ 「言葉、イメージ」＝成員の自己像を構成する（歴史） 1点
- ④ 歴史は（成員の）記憶（とその）操作である 1点

Ⅲ（6点）

記憶は、記憶を局限し、一定の中心へと等質化した人間の歴史より量的に巨大で、歴史以前の物質や遺伝子の形態をも含むから。

\*①と、③・④の並列構造とは、必須ポイント

\*「人間（だけ）の（歴史）」の意を欠くと、1点減点

- ① 主題＝（人間の歴史と比較した）記憶について 配点無し
- ② 歴史＝記憶を局限・一定の中心に・等質化したもの 3点
- ③ 記憶の「ひろがり」＝量的に歴史をはるかに上回る 1点
- ④ 記憶の「深さ」  
＝物質、遺伝子の記憶形態・の延長上の歴史 2点

Ⅳ（6点）

歴史の語義自体が、現存する全成果の集積として、個人の生を決定すると抑え難く感じさせる、ある種の属性を持つということ。

\*①・②は、必須ポイント

- ① 主題＝歴史という「概念」について 1点
- \*「概念」の置換（本質、意味内容など）に加点する
- ② 「何か・強迫的な・性質を含む」（置換） 3点
- \*「強迫的な」＝抑えられない考えを生じる、の意
- ③ 歴史概念の強迫的性質の内容
  - a 現存するすべての（記憶、成果の）集積である 1点
  - b 個人の生を決定する 1点
- \*「私を決定する」は、不可

Ⅴ（16点）

歴史は、個人と集団の記憶とその操作であり、現存する全成果の集積として個人の生を決定する。しかし、個人は過去の無数の他者の言動や精神の痕跡とともに生きつつ、自由な選択や行動を試み、強制力・決定力に抵抗し、その集積や混沌が歴史となるということ。（二二〇字）

\*①・②は、必須ポイント

- ① 構文＝「歴史」とは、②と⑤である 1点
- ② 「それら」とともにある＝「無数の他者の行為、く夢想の痕跡」（置換）・とともに個人が生きる＝無数の他者の・振舞い、言説、思い・の痕跡・とともに個人が生きる 1点・2点・1点・1点
- ③ 喜び＝自由な選択や行動をする 2点
- ④ 苦しみ＝強制力や決定力への抵抗 2点
- ⑤ 重さ＝③・④の集積や混沌 2点
- ⑥ 歴史は、個人と集団の記憶とその操作である 2点
- ⑦ 歴史は、個人（人間）の生を決定する 2点

Ⅵ（各1点）

- a 散逸 b 超越 c 機会 d 信仰 e 矛盾